



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	「雁」の歌における恋情との結びつき：「萩」「黄葉」 との取り合わせを中心に(fulltext)
Author(s)	孫,瑋
Citation	学芸古典文学(11): 13-21
Issue Date	2018-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/150050
Publisher	東京学芸大学国語科古典文学研究室
Rights	

「雁」の歌における恋情との結びつき

—「萩」「黄葉」との取り合わせを中心に—

孫 璋

一、はじめに

『万葉集』における「雁」は、六十七首もあり、ホトトギスに次いで鳥の中で二番目を占めているので、万葉びとに親しまれた素材ともいえる。『万葉集』以外の上代文学における「雁」について、『万葉集歌ことば辞典』（注1）は次のように述べている。

天若日子の喪屋に奉仕する「河雁」（『古事記』『日本書紀』

がおり、興福寺大法師等が仁明天皇の四十賀に献じた長歌に「常世雁」（『続日本後紀』）とある。他の鳥の場合と同じように、天翔ける靈魂なしし靈の国から渡る鳥と観ぜられていた。

（中略）万葉集には、靈魂とかかわる雁は出てこないようである。

記紀における、「雁」が靈魂と関わるといふ捉え方は、どうやら『万葉集』に受け継がれていないようである。

一方、『万葉集』における「雁」は、漢籍から受容されたことについて、しばしば説かれている。その中に、『後漢書』における蘇武の「雁信」の故事を踏まえた「雁の使ひ」は、

春草を 馬昨山ゆ 越え来なる 鴈使者 宿り過ぐなり

（九・一七〇八・泉河辺作歌）

と、早くも人麻呂の歌集にみられるし、天平八年の遣新羅使の歌（十五・三六七六）と家持の歌（十七・三九五三）にも詠まれている。「雁」の歌によく見られる「雁鳴寒」も、漢詩に表現を受容した結果だと指摘されている（注2）。『万葉集』における「雁」が漢籍と密接的に関わるといふことは、認めざるを得ない。

また、集中における「雁」の歌は、

葦辺行く 雁の翼を 見ること 君が帯ばしし 投矢し思
ほゆ（十三・三三四五）

という、防人の妻の歌で雁を狩ることを詠む作以外、ほとんどが、秋風に 山吹の瀬の 鳴るなへに 天雲翔る 雁にあへるか
も（九・一七〇〇・柿本人麻呂歌集・宇治河作歌）

九月の その初雁の 便りにも 思ふ心は 聞こえ来ぬかも
（八・一六一四・櫻井王奉天皇歌）

など、季節との関係が強く意識されて詠まれている。

「雁」の歌における季節感とは、漢詩から受容した結果だと考えられる（注3）。季節感とともに、「雁」の歌における節物との取り合わせも、詠物詩を撰取したことは疑う余地がなからう。六十

七首の「雁」の歌の中で、五十首を超える歌が第三期、第四期にあることも、詠物詩からの影響を示していよう。このように、「雁」の歌は、漢籍との関わり、特に天平二年の「梅花宴」以降、詠物の手法が積極的に歌に摂取される過程で生まれたともいえよう。ところが、「雁」が節物と取り合わせられた歌においても、漢籍とはやや異なった詠み方がある。例えば、卷十の「秋雑歌」にある

イ) 秋萩は 雁に逢はじと 言へればか 声を聞きては 花に散りぬる (二二二六)

が、「雁」と「秋萩」を取り合わせた際に、「逢ふ」と詠んだことには注意すべきである。「逢ふ」は、「①合う。集合する。②逢う。出会う。遭遇する。③結婚する。夫婦関係を結ぶ。④戦う。あらそう。⑤二つのものがともにする動作であることを示す。」(『時代別国語大辞典 上代編』)などの意味を持っているが、ここで詠まれた「逢ふ」は③の意味に当たることが間違いない。動物と植物に詠まれた「逢ふ」は、イ歌しかないが、

我妹子が 結ひてし紐を 解かめやも 絶えば絶ゆとも 直に逢ふまでに (九・一七八九・笠金村歌集)

春霞 たなびく山の 隔れば 妹に逢はずて 月そ経にける (八・一四六四・大伴家持贈坂上大嬢歌)

など、恋人の間に「逢ふ」と詠み込まれた例は多い。つまり、イの歌は、「雁」と「秋萩」の間に恋愛関係を擬して詠んだといえる。もちろん、漢詩において、「秋萩」ではないが、

雁將^レ向、桐始^レ蕤。

(宋書・樂志・宋謝莊・宋明堂歌九首・其四・歌「青帝」)

霜雁排^レ空斷、寒花映^レ日鮮。

(文苑英華・三一〇・陳張正見・重陽殿成金石會競上詩) 人帰^レ落^レ雁^レ後、思^レ登^レ在^レ花^レ前。

(芸文類聚・卷四・隋薛道衡・人日思^レ婦詩)

雁湿行無^レ次、花霏色更^レ鮮。(全唐詩・唐太宗・詠^レ雨)

照岸花分^レ彩、迷雲雁斷^レ行。(全唐詩・唐太宗・春日望^レ海)

雁似^レ衝^レ紅葉、鯨疑^レ噴^レ海潮。

(翰林學士集・唐蘇頌・恩制尚書省僚宴^レ昆明池^レ同用^レ堯字)

など、「雁」と「花」、あるいは「雁」と「紅葉」を取り合わせて詠まれた例が見られる(注4)。これは、初唐になると、「雁」が景物として賞美されているためであろう。しかし、イ歌と比べるとやや異なることがわかる。つまり、漢詩における「雁」と花・紅葉は、美しい花鳥の世界を紡ぎ出すことに働くが、歌における「雁」と萩は、恋情と絡みながら花鳥の世界を作り出している。そこに、万葉独自の発想があると思われる。

本稿では、『万葉集』における「雁」と「萩」、また「雁」と「黄葉」との取り合わせを、漢籍と対照的に考察することにより、歌における恋情との結びつきを検討したいと思う。

二、歌における「雁」と「萩」との取り合わせ

『万葉集』において、「雁」と「萩」が共に詠まれた歌は、巻八の一首、巻十の四首と巻二十の一首しかない。その中の巻八の一首と巻二十の一首は萩の「もみち」を詠むため、第三節で論じる。

「雁」と「萩」との時間的な関係は、「秋萩は 雁に逢はじと」

(イ)のように、雁が来る前に萩の花がすでに散ってしまうのが一般的であるが、「雁がねの 初声聞きて 咲き出たる やどの秋

萩（十・二二七六）という、雁の鳴き声を聞くと花が咲くという捉え方も存している。次に、一首一首の歌を確認して考察する。

まず、問題になったイの歌を見てみよう。諸注釈を見ると、（傍線筆者）

萩は秋の初に咲き、鴈は秋の半、膚寒い風と共に鳴いて来るものである。この風物の推移に細かい目を見はりつつ、子供らしい表現法をとつてゐるのが珍しくて面白い。（『全釋』）

二者季節の相違を歌つて居る。（『私注』）

雁は俗に秋の彼岸に来て春の彼岸に帰るといわれる。萩の花期は秋の彼岸前後。（『釋注』）

などと指摘されたように、「萩」の開花時期と「雁」の飛来時期とのずれ違いに注目した、節物への強い暦意識を踏まえた上での歌と解釈しているものが多い。その中に、歌に詠まれた「逢はじ」について、『代匠記』（精撰本）は、

上句ハ譬へハ人ノチカゴトナトシテ違へヌ如ク、雁ニアハシト萩ノ云ヒタレハニヤ。雁タニナケハ急テ散トヨメリ。物云ハ又草木モ云ヤウニヨムハ、哥ノ習ナリ。第五ニ、梅ノ花夢ニ語ラクトモヨメリキ。

と、「雁に逢はじ」を「萩萩」の言葉として捉えた上、末句の「花に散りぬる」を、「アタ花ナリ」と、両者の間の恋情が空しくなつた、と解釈し、『全註釈』『古典集成』に受け継がれていく（注5）。

当該番歌における「言ふ」の主体が人であるか「萩」であるか、解釈上なお疑点のある歌であるが、「雁」と「萩」の間に擬された恋愛関係は間違いないし、「声を聞きては」の主体が「萩」であることも間違ひなからう。本来、季節が異なるゆえに同時に現れない二つの節物であるが、このように逢わない恋人同士として捉え

て詠まれている。また、「逢ふ」の使い方によつて、「萩萩」が待つ女、「雁」が訪れてくる男として詠まれている。

「雁」と「萩」は、このように緊密的に関係付けられた。卷十の

ロ）雁がねの 来鳴かむ日まで。 見つつあらむ この萩原に
雨な降りそね（二〇九七）

を解釈する際に、一般的には

およそ雁は、月令にも、仲秋之月鴻雁来とあれども、第八卷に、櫻井王の哥に、長月のその初雁とよまれたれば、月令にいへるよりはすこしおそく来るものなり。萩は六月よりさきて、八月中旬にはうつろひはつる物なれば、そのあはひを心得てみるへし。（『代匠記』初稿本）

鴈が来鳴ば、鴈に心をうつしてなぐさむべきなれど、其ノ鴈の来鳴ぬ間は、ひとへに見愛つつあらむ、と思ふこの芽子原に、雨ふりて花をちらすことなかれ、となり。（『古義』）

など、詠む人の絶えずに秋を賞美したい心が詠み込まれたという解釈の中に、『全釋』はあえて「萩に對して鴈聲を聞かうといふのか」と、単純な景物の継起ではなく、「萩」とともに「雁」の鳴き声を聞くと解する。また、

ハ）雁は来ぬ 萩は散りぬと さ雄鹿の 鳴くなる声も うらぶれにけり（十・二一四四）

のように、雁の飛んで来たことで萩の花の散ることを導いたという詠み方がある。無論、この歌における「萩」は、「さ雄鹿」の花妻として詠まれたはずであるが、「雁」との緊密的な関係も読み取れる。

「雁」と「萩」の間に見られる、以上のような緊密的な関係が

定着したためか、ついに次のような一首が詠まれている。

二) 雁がねの 初声聞きて 咲き出たる。やどの秋萩 見に来我が背子(同・二二七六)

今まで見て来た歌は、すべて「雁」と「萩」の季節の相違あるいは継起を詠んだが、この一首は、二者を同時期のものと捉えている。そのため、諸註釈の中に、

雁は、秋深くなつて来るので、その初聲を聞いてハギが咲き出たというのは、季節が合わない。ハギの説明のために設けたので、かような歌になつたのだろう。(『全註釋』)

一般には、陰曆九月初雁が来る時期(八・一六一四)は、萩の花はすでに盛りを過ぎて、散り始める時期であった。やや後れて咲き始めた庭の萩を、興趣を添えるために「雁がねの初声聞きて咲き出たる」と歌なしたものであろう。(『全歌講義』)

と、歌のわざとして解釈したものが見られる。『私注』はさらに、花を擬人したことが、歌を淺くして居る。

という評価を下している。

が、ここで注意したいのは、萩が雁の鳴き声を聞いて咲き出す、という構図である。これについて、『全注(阿蘇)』は「雁の初声に誘われて萩の花が咲いたとしている」と、『全歌講義』は「雁の初声に誘われて萩の花が咲いたとしている」と、解釈している。しかし、わざと「初声」と詠むのは、花を咲かせるまでにずっと待っている「萩」の姿も、ここに詠みこんだからであろう。『全解』が、

「萩」は口実。私に逢いに来なさい、の意。咲く花は待つ女の比喩でもある。

と歌の主旨を捉えたのは、正鵠を射た論だと考えられる。

まとめると、集中における「雁」と「萩」の間に、季節の景物の取り合わせ以上の、恋人同士に擬された緊密な関係が見られることを確認してきた。そのような捉え方は、前掲のイの歌に集中的に詠み込まれたこともわかる。この「逢ふ」は、「さ雄鹿の心相思ふ。秋萩の(十・二〇九四・詠花)における「心相思ふ」が「雄鹿」と「秋萩」との恋情を示すのと同様に、「雁」と「萩」との恋情を示す重要な表現だと考えられる。

また、イ歌における、植物が意識的に鳥の鳴き声を聞くという詠み方は、すでに論じた口、ハ、ニの歌以外に、「雁」と「黄葉」との取り合わせにも見られる。次に、集中における「雁」と「黄葉」との取り合わせを考察しつつ、二者の間における恋情との結びつきを見てみよう。

三、歌における「雁」と「黄葉」との取り合わせ

集中における「黄葉」は、秋の景物として、春の「花」と対照的に詠まれたことは言うまでもなからう(注6)。集中において「雁」と、「もみち」もしくは「色付く」が共に詠まれた歌は十二首ある。

「雁」と「黄葉」は、『札記』・月令に、

(季秋之月) 鴻鴈来賓・是月也、草木黄落。

とあるように、漢籍においては、従来秋の景物として捉えられている。漢詩においても、

秋風起兮白雲飛、草木黄落兮鴈南歸。

(文選・四十五・漢武帝・秋風辞)

秋風蕭瑟天氣涼、草木搖落露為霜、羣燕爭歸鴈兩翔。

(文選・二十七・魏文帝・燕歌行・其一)

霜露紛兮交下、木葉落兮萋萋。

候鴈叫二分雲中、歸鷺翻分徘徊。

(芸文類聚・三十四・哀傷・魏文帝・寡婦詩)

などの例が多い。歌における「雁」と「もみち」との取り合わせは、漢籍を受容した結果だと考えられる。

例えば、

雁がねは 今は来鳴きぬ 我が待ちし 黄葉はや継げ 待た

ば苦しも (十・二一八三)

という一首は、両者の関係をよく示すことができよう。『全註釋』が、「雁に續いて黄葉の早くなることを願っている。季物の順序のよい來訪が取り扱われている。」と、また『全歌講義』が、「萩の花が散りはじめるとき、シベリア方面から雁がやって来ることは、前に歌(二二二六)があつたが、その頃が、黄葉し始める時期でもあるので、この表現がある。」と解釈したように、当時は「雁」と「もみち」の季節の重なりを強く意識しているようである。

このような曆意識は、人麻呂歌集にすでに見られる。次の一首である。

a) 雲隠り 雁鳴く時は 秋山の 黄葉片待つ 時者雖過(九

・一七〇三)

「時者雖過」について、『代匠記』(精撰本)は、

雖過ハ、此二字點落タリ。スクレト、讀ヘシ。長月ノ其初雁

ト第八ニモ有ツレハ、鴈鳴時ノ長月ニ至テ、時ハ過レトモ猶

秋山ノ色付カネハ、黄葉ヲ片待テアルトナリ。又第二ノ句ヲ、

鴈鳴時ヲト點シテ、黄葉スヘキ時ハ過レト、鴈鳴時モミチセ

ムト、木ノ葉ノ片待テ色シテアルトヨメル歎。

と、もみちになる季節が過ぎたがまだ色づいていないと、黄葉を待つ心を詠むと解釈しているが、その後の注釈書を見ると、

時者雖不過／ときはすぎねど…『略解』所引宣長説、『新考』

『全釋』、『佐々木評釋』、『澤瀉注釋』

時者雖過／ときはすぐれど…『金子評釈』、『私注』、『古典文学大系』(注7)

など、解釈が分かれていることがわかる。訓み方の相違とともに、

鴈の鳴渡る時は、木ノ葉も盛に色付^{トキ}節なれども、未だ心だらひに黄葉せぬ故に、時は過行ども、なほその盛に色付^{トキ}を偏に待て居るぞとなり。

〔『古義』飛來した「雁」と「黄葉」の時期は一致する。こ

こは、すでに「雁」の鳴く声が聞こえるのに、また「黄葉」が始まらないことをいうか。〔『全解』

のように、本来「雁」と「もみち」とは季節が一致するという説

と、

來雁と黄葉の不一致を説くのは従うべきであるが、黄葉が不

十分というのではなく、歌意は雁が来てもいまだ黄葉せぬのは例年のことであり、雁鳴く時は黄葉を待つ時なのである。

雁の渡りの時期は過ぎ、雁が周辺の田野に遊ぶ時期になったのに今年は一向に黄葉が始まらないことを歌っているとみる

べきである。時が過ぎないのであるならば、片待つ心も弱くなり、歌うにも及ばないことになる。この歌も前二首と同じく雁を歌うを主意とすべきである。トキハすぐレドの訓は

例年の季節現象が今年は一致せぬ嘆きを表すから、雁を歌う

範疇にとどまる。

のように、両者の季節が一致しないとする『全注（金井）』の説がある。解釈上難しいためか、『全歌講義』は、「まだ見ぬもみじを期待する気持ちを詠む」「もみじの美への憧れをあらわす」と、時期に触れずに解釈している。『全解』も解釈を試みたあと、

あるいは、先の二首が恋歌的情調をもつから、何らかの寓意が背後にあるか。後考を俟つ。

という一言を付している。

最後の一句は、「ときはすぎねど」と訓まれる場合、まだもみちの季節ではないが今からその季節を待ち望む心情を表すことになら、「ときはすぐれど」と訓まれるならば、季節が過ぎてしまったのに未だ色づいていないもみちが待ち遠しいと解釈することになろう。どちらかという決定的な根拠がないが、いずれにしても、「雁」と「もみち」に対する強い歴史意識が歌に詠み込まれた、と考えられる。

また、人麻呂と同じ時期の穂積皇子の歌が一首ある。

b) 今朝の朝明 雁が音聞きつ 春日山 もみちにけらし

我が心痛し（八・一五二三）

この一首について、従来注目されたのは、結句の「我が心痛し」であろう（注8）。ところが、ここで歌における「聞きつ」にも注意したい。後ろに「我が心痛し」があるため、「聞く」の主体は「我」と捉えられるが、「春日山」も同時に「雁」の鳴き声を聞く主体と理解することも可能ではないか、と思う。つまり、人が雁の鳴き声に耳を傾ける一方、春日山の黄葉もその鳴き声を合図にして色づいた。かように解釈する可能性は、以下の歌にも見られると考えられる。

c) 今朝の朝明 雁が音寒く 聞きしなへ 野辺の浅茅そ

色付きにける（八・一五四〇・聖武天皇）

d) 雲の上に 鳴きつる雁の 寒きなへ 萩の下葉は もみ

e) ちぬるかも（同・一五七五・天平十年橘家宴歌）

e) 雁が音を 聞きつるなへに 高松の 野の上の草そ 色

付きにける（十・二二九二）

f) 雁がねの 声聞くなへに 明日よりは 春日の山は も

みちそめなむ（同・二一九五）

g) 雁がねの 寒く鳴きしゆ 水茎の 岡の葛葉は 色付き

にけり（同・二二〇八）

h) 雁がねの 寒喧之徒 春日なる 三笠の山は 色付きに

けり（同・二二二二）

時間の並行を表す「なへ」、あるいは時間の起点を表す「ゆ」を詠むことから、「雁」と「もみち」との間の緊密な時間関係を意識したことがわかる。一方、右に挙げた歌における「聞く」は、草木が主体とも解釈しうるのではないか。なぜなら、「雁」と「萩」の歌の中に、イの「声を聞きては、花に散りぬる」のような、植物が鳥の鳴き声を聞くという擬人的な詠み方が見られるからである（注9）。

そして、以上のような詠み方を踏まえたか、次のような一首が詠まれていく。

i) 今朝鳴きて 行きし雁が音 寒みかも この野の浅茅

色付きにける

（八・一五七八・阿倍虫麻呂・天平十年橘家宴歌）

この歌は、聖武天皇の歌（c歌）を踏まえたことは、言うまでもなからうが、「聞く」を詠まずに、原因を表す「み」で上と下を連結したのが、注目されるべきだと思う。例えば、『澤瀉注釋』は、

今朝鳴いて行つた雁の鳴く聲が寒さうに聞えたからであらうか、この野の浅茅が色づいたことよ。

と訳し、また、『全註釋』は、

雁の聲と浅茅の黄葉との密接に結合した風趣のある作である。

と解釈したのもあるが、『全解』が、寒々とした「雁」の鳴き声「浅茅」を黄葉させたとする。▼一五七五歌を受ける。

と述べ、雁の鳴き声が直ちにもみちをさせるといふ解釈が、より明瞭となる。この一首はdとともに聖武天皇の歌を踏まえながら、「聞く」の省略により、「もみち」も「寒し」と感じられるように読み取れる効果を果たす。さらに、集中における「寒し」に、恋人の不在によつてもたらした孤独感を持つことを合わせて考え、「雁」と「もみち」の間に恋情をより明確に認めることができるのではないかと考えられる。

そして、d歌における「萩の下葉は」は、「雁」と「萩」、また「雁」と「もみち」との取り合わせを融合した表現であろう。『全註釋』の言つた「數種の現象が關聯してあらわれるとする思想」の現れでもあらう。また、「雁・もみち」「雁・萩」との融合を示すことができる、もう一つの例は、天平勝寶五年の大臣清麻呂の歌である。

天雲に 雁ぞ鳴くなる 高円の 萩の下葉は もみちあへむ
かも（二十・四二九六）

この一首は、『全釋』が、

雨雲の中に鳴く雁の音と、萩の下葉の紅葉との組合せは、言ふべからざる味ひがある。高朗にして繊細。萬葉人の天然への目の注ぎ方が、この時期になつて著しく變つて來たことを認めざるを得ない。佳い作だ。

と、高く評価するように、万葉後期になつて、種種の節物を細かく賞美する姿勢を示す作でもあらう。

以上のように、「雁」と「もみち」との取り合わせにおける「聞く」が、人の「雁」の鳴き声に耳を傾ける姿勢を示す一方、黄葉もその鳴き声を合図にして色付く、と解釈できることを確認してきた。つまり、「雁」と「もみち」との取り合わせは、單純に節物の継起を表すのみならず、両者の間にごく緊密な關係も構築されている。「雁・萩」ほど明らかではないが、「雁」と「黄葉」も、恋情と結びついて詠まれている、と考えられる。

そして、「聞く」が両者の恋情を示す重要な表現だ、と指摘できるように。

四、まとめ

以上、『万葉集』における「雁」と「萩」、「雁」と「もみち」との取り合わせにおける、植物と動物の間に擬された恋情を考察してきた。「雁」と「萩」の間に、「逢ふ」「聞く」の關係を作り出す表現からは、恋情との結びつきが直接に読み取れるが、それを踏まえれば、「雁」と「もみち」との取り合わせにおける「聞く」も、主体が「もみち」であると捉えることが可能になる、と考えられる。

このような詠み方は、漢詩における節物の取り合わせとは明らかに異なり、歌独自の考え方だと捉えたほうがより適切であろう。『万葉集』において、「雁」が詠まれた歌はほぼ第三期以降である。「雁」と植物は、恋情と結びつきながら取り合わせられるという発想は、どこから來たのか。次なる課題として考えていきたい。

※本文引用、用例数は、佐竹昭広・木下正俊・小島憲之『萬葉集本文篇』（塙書房、二〇一三）に拠る。

注

(1) 『万葉集事典』（学燈社、一九九四）。

(2) 堺信子「古代文学の「雁」」『上代文学研究』八、一九八三・

三二、奥村和美「秋風と雁―天平十八年秋の家持歌―」『萬葉』

一六四、一九九八・二）など。

(3) 芳賀紀雄「萬葉集における花鳥の擬人化―詠物詩との関連をめぐって―」『萬葉集』における中国文学の受容』塙書房、二〇〇三・一〇、初出一九九二）。

(4) 漢籍について、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩 上・中・下』（中華書局、二〇〇八）、梁沈約『宋書』（中華書局、一九七四）、唐歐陽詢『芸文類聚』（香港中華書局、一九七三）、『全唐詩』（中華書局、一九六〇）を参照している。

(5) 例えば、『全註釈』は、アハジは、逢うまいだが、アフとは、女が男に逢うをいい、婚姻を承諾することになる。と述べたあと、

秋ハギは雁に逢わないと言っているからか、雁の声を聞いては、花になって散つて行く。

秋萩は雁の妻にはなるまいと言っているからであろうか。と訳している。『古典集成』も、

と訳している。『全歌講義』は『集成』の訳し方を「やや訳し過ぎの感がある」と指摘したが、「それに近い感情を萩に持たせていることは事実であろう」と、賛成する姿勢を示す。

(6) 拙稿『万葉集』の「モミチ」の一考察―天平十年の橘奈良麻呂宴歌を中心として―」『古代中世文学論考』三三、二〇一六

・八）で、漢詩における「黄葉」と比較した上、歌における「黄葉」は秋の頹廢を象徴する枯れ葉も見られる一方、春の花と同様に色づき、めでたい景色として賞美される姿勢が、漢詩との大きな相違点である、という結論を付けた。本稿もこのような捉え方を踏まえて検討したいと思われる。

(7) それぞれの訳文は次のように示す。

時季は過ぎたけれども（『金子評釈』）

実際はその時は過ぎて居るのであるけれども（『私注』）
時季はもう過ぎるけれど（『古典文学大系』）

(8) 漢詩とは異なり、秋を悲哀的に捉えた詠み方は、歌に珍しい。

結句の「我が心痛し」は、秋を悲しむという漢詩の感覚を取り入れたものだと考えられる。例えば、『全解』は「我が心痛し」を解釈した際、

秋は豊穡の季節ゆえ讚美の対象であるべきだが、それを凋落の季節と見て悲哀の対象とするのは、中国詩文の「悲秋」の影響による。配列上は但馬皇女との悲恋を下敷きにする。逢えないまま季節が空しく推移していくことへの嘆きになる。

という説明を加えている。

(9) 『全歌講義』はf歌を解釈する際に、

「声聞く」を作者ととらずに、春日の山を擬人化して、山が雁の鳴く声に感じて黄葉し始めるととれないこともない。雁が来る時期には萩の花が散るのを、「秋萩は雁に逢はじといへればか」（二二二六）と詠んでもいるのだから、雁の声に感応して山が黄葉し始めるととってもおかしくは

ない。ただ、すでに見てきた(二一九一、二一九四など)ように、類型の表現の哥は少なくないので、それらを全てそう見てよいかということになると疑問で、また全てを一律に見なければならぬというわけのものでもあるまい。その点、此歌の場合、同時にではなく、聞いた後に、翌日に黄葉し始めるという把握の仕方が、他と異なるので、上述のような理解も許されるのではないかと思われる。と、集中における類型の多いことに気づき、この歌における「明日よりは」という詠み方の苦心を指摘している。『私注』が「類型的の作にすぎない」(e歌)とまで評価したように、当時の「雁」と「もみち」に対する類型的な捉え方が窺われる。

(そん・い／一橋大学大学院博士後期課程)